

早期教育のあり方について考える —保育科学生とその保護者への習い事についての回想調査に基づいて—

成田 朋子

I はじめに

今日、乳幼児期の重要性を否定する人、あるいは就学前教育の重要性について異論を唱える人は皆無と言ってよいと思われる。しかし目の前の子どもたちに目を転じると、果たして子どもたちは望ましい状況で成長しているといえるだろうか。

振り返ってみると、わが国では高度経済成長時代を経て1990年代に入るまでは、どちらかといえば物質的な豊かさが追い求められてきたといえよう。一方、1990年の1.57ショックを契機に問題提起された少子化傾向はその後もとどまることなく続き、子どもの数は減り、それに反比例するかのよう保護者たちは教育熱心になり、おけいごと、あるいは習い事を経験する子どもが増加し、早期教育の定義も明確になされないまま、いわゆる早期教育熱は高まってしまったのである。

このような社会背景の中で子どもたちの心は十分育ったのだろうか。1990年代に入ってバブル経済が崩壊した後、2008年にはリーマンショックでますます経済状況が悪化した結果、ストレスフルな大人の下で子どもたちの心の育ちにも影響があるのではと懸念される。

筆者は1997年、人生の早い時期の様々な経験が子どもの発達にどのような意味をもつのかを調べるために、習い事についてのアンケート調査を行った。調査の対象を知育の教室以外のものとし、幼稚園・保育所・学校で行われる教育課程外のもので特定の指導者に習っているものを念頭に置いて「習い事」ということばを使って調査した⁽¹⁾。

アンケート調査から明らかになったことは、学生は、兄弟や友達の影響もあって、自分自身で習い事を始めたいと思い、保護者の側でも子どもの気持ちを汲み取り、子どもに対する期待や夢もあって、習い事を始めることになり、平均、小学生から中学生の間に3種類位の習い事に通っていたこと、これらの習い事を振り返ってみて、親子とも習い事をしてよかったと思い、現在にプラス

になっていると感じていること、当時の行き過ぎとも思える早期教育については、多くの者が賛成ではなく、明確に反対であると回答したのは保護者よりも学生の方に多いことなどであった。また、かつて経験した習い事に対して否定的あるいは懐疑的な感情を抱いているケースを検討した結果、平均よりも早い時期から、主として保護者の意向で、平均よりやや多くの習い事を始めた場合に、後々、習い事をしたことに対して、肯定的な印象を持ってないことが示唆された。

1997年に調査してから16年を経た現在、子どもたちの習い事に関わる状況は変化したのであろうか。上記のとおり、1991年にバブルが崩壊した後、2008年にはリーマンショックが経済を混乱に導いたのであるが、これら経済状況の悪化は当然子どもへの教育に何らかの影響を及ぼしたと考えられる。

そこで時代の変化がどのような形で現れるのか、また早期教育に対する意識はどのように変化したのかをみるために、1997年に行った調査と同様の調査を行うこととした。

II アンケート調査の内容と方法

2013年6月、本学1年次「発達心理学I」の授業時に資料I(101頁)のアンケート用紙を配布し、記入させた後回収した。

アンケートの内容は、1997年同様、子どものころに経験した習い事の種類の種類、習い事を始めたきっかけ(あるいは目的)、習い事をしてよかったかどうか、現在の自分に役立っていると思うかどうか、早期教育についてどう思うか、などから成っている。

アンケート用紙回収後、学生に資料II(102頁)を配布し、保護者に回答を依頼すること、次回授業時に提出することを指示した。

Ⅲ アンケートの結果と考察

資料の整理にあたっては、学生本人と保護者の回答が揃っているもののみを採用した。その結果、6月26日の「発達心理学Ⅰ」受講生202名の内148名（73%）分を考察の対象にした。

(1) 全体の傾向

まず、考察の対象とした148名の全体的傾向を

みることにしよう。

① 習い事の種類

何種類の習い事をしてきたかを表1に示す。

記入の前に、知育に関するものは列挙しないようにと指示したにもかかわらず、塾や公文をあげた者もいたが、それらは考察の対象から省いた。

比較するため1997年調査時のデータも表1に再掲する。

表1 経験した習い事の種類

調査年	習い事の数(種類)	0	1	2	3	4	5	6	7	8	計
2013年	人数(人)	6	28	34	42	27	5	3	2	1	148
	割合(%)	4.1	18.9	23.0	28.4	18.2	3.4	2.0	1.4	0.7	100
1997年	人数(人)	1	10	22	42	31	8	4	0	0	118
	割合(%)	0.9	8.5	18.6	35.6	26.3	6.8	3.4	0	0	100

習い事を何もなかった者から8種類の習い事を経験した者までいるが、3種類あげた者が42名で一番多く、2種類あげた34名がそれに続いている。次に4種類、1種類をあげた者が続く。平均2.67種類の習い事を経験していたことになる。

1997年の結果は、一番多い分布は2013年同様3種類であるが、4種類、2種類が続き、平均は3.12種類であった。

1997年にはいなかった7種類、8種類をあげた者が2013年調査ではそれぞれ2名、1名いるが、全体的に見て、習い事の種類は16年を経て僅かに減少傾向にあるといえよう。

1997年と2013年の分布をグラフに示す。

具体的にどのような習い事をしてきたかを、人数の多い順に表2に示す。

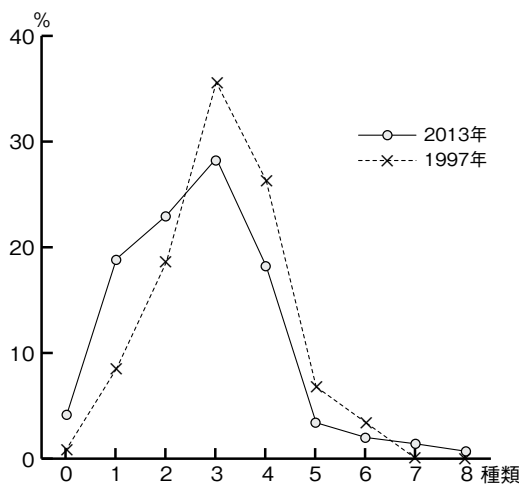


図1 習い事の種類

表2 2013年 習い事別人数と割合

	ピアノ	習字	水泳	英語	算盤	体操	バレエ
人数(人)	102	64	61	35	25	11	10
割合(%)	68.9	43.2	41.2	23.6	16.9	7.4	5.4

表3 1997年 習い事別人数と割合

	ピアノ	習字	算盤	水泳	エレクトーン	英語	絵画
人数(人)	94	86	59	52	17	17	8
割合(%)	79.7	72.9	50.0	44.1	14.4	14.4	6.8

多くの学生があげた習い事は表2のとおりであり、バレエ以下はテニス9名、エレクトーン8名、ダンス6名、絵画5名、バスケットボール、合唱4名ずつ、リトミック、バトン、バトミントン、空手3名ずつ、パソコンは2名があげていた。

1997年と比べると、割合は若干少なくなっているものの、1997年、2013年とも一番多くの者が経験した習い事はピアノである。調査した学生たちが保育科学生である故の特徴であろう。2番目としては1997年、2013年とも習字が続いている。

16年を経て新たにあげられた習い事は「体操」

「バレエ」であり、7位までの順位から消失したのは「エレクトーン」「絵画」である。時代を経て健康、体力づくりに関心が向けられるようになったことを表しているのであろうか。

② 習い事をしてきた期間

次に、①であげられた7種類の習い事個々について習っていた期間を整理してみよう。

表3、表4、図2に、始めた時期の早いものからあげる。

表3 2013年 習っていた期間

	始めた時期	止めた時期	今も続けている者の人数(割合)
体操	4歳3か月	8歳4か月	0
水泳	5歳8か月	10歳7か月	0
ピアノ	5歳9か月	12歳1か月	20 (13.5%)
バレエ	5歳11か月	12歳5か月	0
算盤	7歳0か月	11歳8か月	0
習字	7歳3か月	12歳7か月	5 (3.4%)
英語	8歳2か月	12歳8か月	0

表4 1997年 習っていた期間

	始めた時期	止めた時期	今も続けている者の人数(割合)
ピアノ	5歳8か月	12歳8か月	39 (41.5%)
エレクトーン	6歳1か月	11歳1か月	2 (11.8%)
水泳	6歳4か月	10歳7か月	0
習字	6歳9か月	12歳5か月	9 (11.5%)
絵・図工	6歳10か月	10歳3か月	0
英語・英会話	7歳10か月	13歳2か月	2 (11.8%)
算盤	8歳5か月	11歳9か月	0

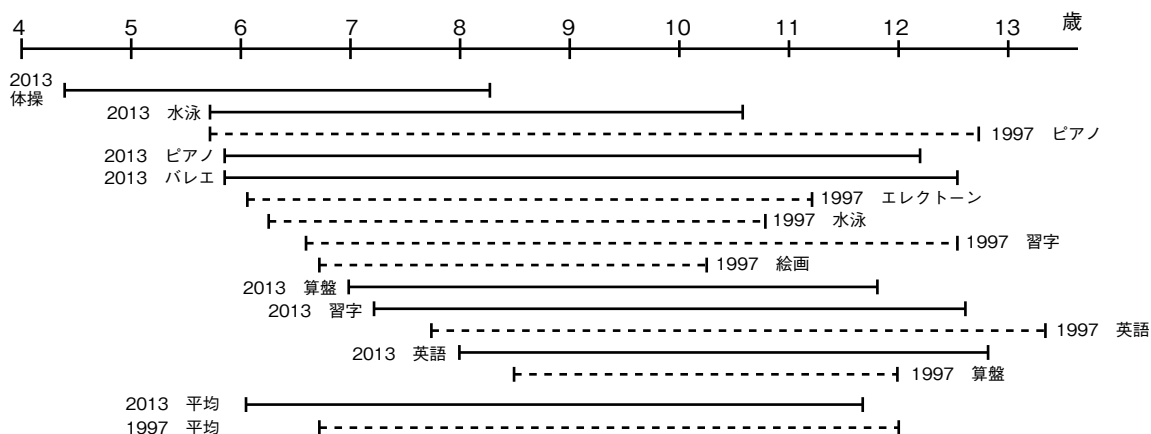


図2 習い事をしてきた期間

早期教育のあり方について考える

表3、表4、図2から、1997年、2013年調査を通して、一番早く始められた体操では4歳3か月という早い時期から始められたことがわかる。

2013年調査で表にあがっている習い事は平均6歳3か月から11歳6か月まで続けられたことになる。これが1997年調査では、6歳10か月から11歳8か月の間になり、2013年時点で、始めた時期は

7か月、止めた時期は2か月早くなっていることがわかる。

③ 習い事を始めたきっかけ (目的)

学生が習い事を始めたきっかけを表5、図3に示す。

表5 学生が習い事を始めたきっかけ (複数回答)

	2013年	1997年
	人数 (割合)	人数 (割合)
自分の意思で始めたいと思ったから	67 (46.9%)	73 (62.4%)
兄弟や友達が通っていたから	54 (37.8%)	55 (47.0%)
新しい友達が欲しかったから	1 (0.7%)	0 (0%)
親など大人に勧められて	66 (46.2%)	46 (39.3%)
その他	4 (2.3%)	13 (11.1%)

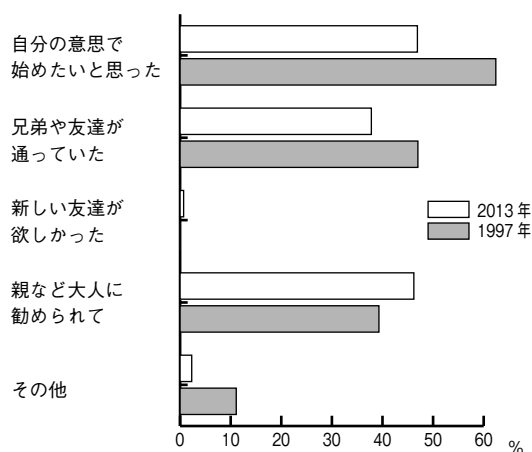


図3 学生が習い事を始めたきっかけ

46.9%の学生が「自分の意思で始めたいと思ったから」と回答しているが、それと同じ程度の46.2%の者が「親など大人に勧められて」と回答している。3番目に多いのは「兄弟や友達に通っていたから」の37.8%である。

1997年の調査結果においても、一番多かったのは「自分の意思で始めたいと思ったから」であるが、その割合は62.4%と2013年調査よりも多い。1997年度の2番目は「兄弟や友達に通っていたから」の47.0%で、「親など大人に勧められて」は3番目の39.3%である。

1997年から2013年調査時点になって、学生たちは自分の意思で決めもするが、親など大人の意見がより強くなったのであろうか。

保護者についても表6、図4に表す。

表6 保護者が習い事を始めさせたきっかけ (複数回答)

	2013年	1997年
	人数 (割合)	人数 (割合)
子どもが習いたいと言ったから	53 (37.1%)	64 (54.7%)
兄弟や友達に通っていたから	9 (6.3%)	14 (12.0%)
友達作りのため	17 (11.9%)	13 (11.1%)
何かを身につけてほしいと思ったから	70 (49.0%)	62 (53.0%)
将来活かしてほしいと思ったから	38 (26.6%)	17 (14.5%)
その他	12 (8.4%)	6 (5.1%)

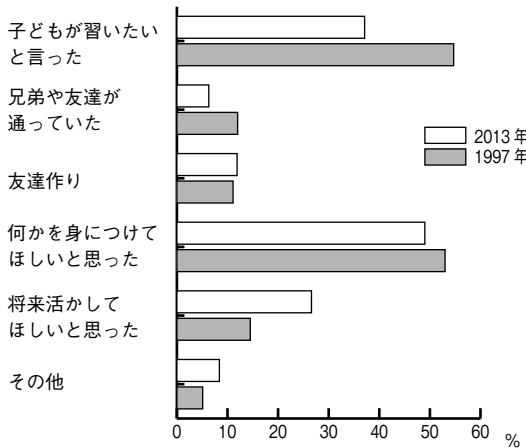


図 4 子供に習い事をさせた理由

保護者の回答では「何かを身につけてほしいと思ったから」が一番多く (49.0%)、以下「子どもが習いたいと言ったから」(37.1%)、「将来活かしてほしいと思ったから」(26.6%)が続く。「何かを身につけてほしいと思ったから」「将来活かしてほしいと思ったから」は保護者側の意向であり、2項目を合計すると75.6%となり、多くの保護者が子どもへの期待から習い事を始めさせたといえるのではないだろうか。

1997年で一番多いのは「子どもが習いたいと言ったから」(54.7%)で2013年より割合が高く、以下「何かを身につけてほしいと思ったから」(53.0%)、「将来活かしてほしいと思ったから」(14.5%)の順であった。「何かを身につけてほしいと思ったから」と「将来活かしてほしいと思ったから」の割合の合計は67.5%で、2013年調査より少ない数値である。

表5、表6、図4から、16年を経過して、本人の意思は尊重されてはいるが、その程度は僅かに減少し、それに対して保護者の意向が少しずつ強くなってきていることが読み取れるのではないだろうか。

④ 習い事を始めたきっかけについての親子の一致度

上記③では習い事を始めた理由を親子別々に整理したが、始めたきっかけは親子で必ずしも一致しているとは限らない。そこで、どの程度一致し

ているかをみてる。学生が「自分の意思で始めたいと思ったから」と回答し、保護者が「子どもが習いたいと言ったから」と回答した場合等を一致群とし、学生が「親など大人に勧められて」と回答しているのに、保護者が「子どもが習いたいと言ったから」と回答した場合等を不一致群とした。

表7 きっかけについて親子の一致の程度

	2013年	1997年
	人数 (割合)	人数 (割合)
一致群	89 (62.2%)	87 (74.4%)
不一致群	54 (37.8%)	30 (25.6%)

6割以上がお互い矛盾しない理由をあげているが、4割近くは始めた理由が親子で不一致であり、また1997年と比較して不一致の割合が増えていることがわかる。

⑤ 習い事をして(させて)よかったかどうかについて

筆者は、どのような習い事でも、後から振り返ってやってよかった経験であってほしいと思うが、習い事をしてよかったかどうか、現在にプラスになっているかどうかについて、その割合をみてる。

表8 習い事をしてよかったかどうかに対する回答

		学生の回答 人数 (割合)	保護者の回答 人数 (割合)
2013年	よかった	138 (96.5%)	139 (97.2%)
	プラスになっている	136 (95.1%)	136 (95.1%)
1997年	よかった	109 (93.2%)	114 (97.4%)
	プラスになっている	114 (97.4%)	111 (94.9%)

親子とも大部分の者が、若干の差はあるが、「やってよかった」「プラスになっている」と回答している。

⑥ 習い事をしなかったケース

習い事をしなかったケースについても理由を回

答する欄を設けてあり、その回答をみると、習い事をしなかったと回答した学生は6名で、4名の記入があり、「したいと思わなかった」「忙しかったから」と端的に回答している者もいる。保護者の方では「本人の希望」「金銭的な面もあるが、習い事よりものびのび遊んだりして、いろいろなことを身に付けた方が良かったから」「外で遊ばせたかったから」などの記述があった。2ケースについては学生、保護者とも未記入であった。

1997年調査時、習い事をしなかった者は1名であったが、その理由は学生側は「したくなかった」、保護者側は「近所の同年の子どもが何もなかったから」と記載されているのに比べて、2013年調査では保護者の意向がより明確に打ち出されているケースがあるということになるのか。

⑦ 子どもの頃に初めておけば（始めさせておけば）よかったと思う習い事について

「振り返ってみて、子どもの頃に初めておけばよかったと思う習い事はありますか。」に対する回答で、習いたかったものとして、多くあげられていたもの上位5つは、ピアノ（42名）、習字（27名）、ダンス（26名）、バレエ（8名）、英語・英会話（8名）であった。理由は、「保育士になるのに必要だから」「今苦労しているから」「中・高時代できなかつたから（英語）」「きれいな字が書きたいから」「踊れることにあこがれを持っているから」などである。

始めておけばよかったと思うものとその理由について学生たちは、現に今苦労している状況から、また保育者の仕事内容から考えて回答していることがうかがえる。

保護者が始めさせておけばよかったと思う習い事は英語（24名）、ピアノ（18名）、習字（8名）、水泳（7名）、算盤（6名）であった。理由は「就きたい職業に必要なから」「時間をかけて（ピアノの）基礎を学ばせたかった」「今苦労しているのを見て」「中高の英語は社会に出てあまり役に立たない」「話せるようになってほしかった」「左利きを直してあげたかった」などである。

学生が多くあげているものと順位が異なっていることがわかる。

⑧ 早期教育の是非に対する回答

表9、図5に早期教育の是非に対する割合を示す。

表9 早期教育に対する賛否の割合

		学生の回答 人数（割合）	保護者の回答 人数（割合）
2013年	賛成	33 (22.3%)	17 (11.5%)
	どちらともいえない	73 (49.3%)	105 (70.9%)
	反対	39 (26.4%)	19 (12.8%)
	NA	3 (2.0%)	7 (4.7%)
1997年	賛成	2 (1.7%)	4 (3.4%)
	どちらともいえない	54 (45.8%)	85 (72.0%)
	反対	62 (52.5%)	29 (24.6%)

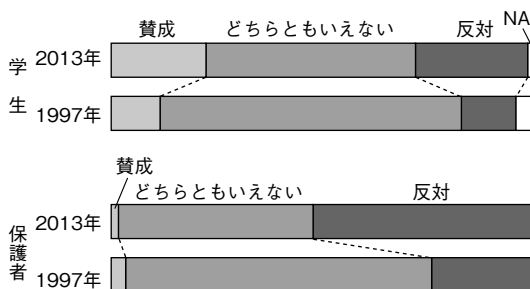


図5 早期教育に対する賛否の割合

2013年、1997年ともに、保護者の約7割が「どちらともいえない」と回答し、学生の半数近くが「どちらともいえない」と答えている。その一方で1997年時点の学生は1.7%のみが賛成で52.5%が反対と回答していたのが、2013年調査では賛成22.3%、反対26.4%と賛成が大幅に増加したことが特徴的である。

学生の賛否の理由については、「早いほど身につく」「可能性が高まる」「何事も早めが大事」「親自身が子どものためと思ってやっていることだし、マイナスにはならないと思う」から賛成、「生まれてからでいい」「意味がない」「その時にあったことをやるべきで、必要がないことはやらなくてよい」から反対、「してもよいけどしなくても元気に育つ」「本当にプラスになるかわからない」から「どちらとも言えない」等であった。

保護者の賛否の理由については、賛成の理由は「能力が高まると思う」「色々な研究データにより良い結果が得られるのであれば良い」、反対の理由は「スキンシップやふれ合いを大切にしたい」「親

のエゴ」「早すぎる」等であり、「どちらとも言えない」理由は「その子にとってプラスになれば良いが、かえってマイナスになることもあると思う」「いろんな考えがあるので、それぞれが良いと思うことをすればよい」「やり方次第」「早い時期からの過熱はどうかと思うが、音楽を聴いたりするのは良いことだと思う」「一方的に与えるかたちは子どもの創造性を押し込めてしまう」「心を育てる方が大切」等、学生に比べてより多くの記述があった。しかし記述されている理由のほとんどは1997年と比べてあまり差は感じられないものであった。

(2) 習い事をしたことに対して否定的・懐疑的なケース

「はじめに」で述べたように、筆者はどのよう

な習い事であれ、振り返ってみてやってよかったと思える経験であってほしいと思うが、今回の調査でも、やらなければよかった、やっても意味がなかった等否定的な感想が何名かにみられた。

「保護者は肯定的であるが、学生自身が否定的」「学生は肯定的であるが、保護者が否定的」「両者とも否定的」なケースがそれぞれ8ケース、4ケース、2ケース、計14ケースあり、148名中9.5%が肯定感を持っていないことがわかった。

これら14ケースの特徴を、以下の①②③からみてみよう。

① 習い事の数、始めた年齢、止めた年齢

14ケースの習い事の数、始めた年齢、止めた年齢を表に示す。

表10 習い事に否定的なグループの傾向 2013年

	学生が否定的	保護者が否定的	学生・保護者ともに否定的	14ケース全体
習い事の数	2.6	3.0	2.5	2.7
始めた年齢	6歳0か月	3歳9か月	5歳6か月	5歳3か月
止めた年齢	11歳11か月	14歳3か月	13歳0か月	12歳9か月

表3の148名全体の習い事の数、始めた時期、止めた時期と比較すると、若干早く始め、平均より長く習っていた場合に否定感情を持ちやすいということであろうか。特に保護者が否定的な場合、他よりもはるかに早く始め、遅く止めていることがわかる。

1997年調査では「保護者は肯定的であるが、学生自身が否定的」「学生は肯定的であるが、保護者が否定的」「両者とも否定的」なケースはそれぞれ6ケース、4ケース、2ケース、計12ケースあり、118名中10.2%であった。習い事の数、始めた年齢、止めた年齢を表11に示す。

表11 習い事に否定的なグループの傾向 1997年

	学生が否定的	保護者が否定的	学生・保護者ともに否定的	12ケース全体
習い事の数	4.7	2.5	2.5	3.6
始めた年齢	3歳8か月	7歳0か月	4歳6か月	4歳11か月
止めた年齢	13歳8か月	12歳9か月	11歳0か月	12歳11か月

2013年、1997年調査ともケース数が少なく、個別的な要因が左右していると考えられるが、平均より早く始め、長く習っていた場合に否定感を持ちやすい傾向が示されている。また1997年の調査では、多くの習い事を早くから始めた場合に否定感が生まれると考察したが、今回の調査ではほとんど差がなかった。

しかしながら、一方では肯定感を持ち、現在まで続けている学生も多数いるわけで、学生自身がその習い事に魅力を感じれば、長く続けられるは

ずである。否定感を持つケースでは、学生の意向にかかわらず止めさせてもらえず、そのまま続けた結果かもしれない。

② 習い事を始めたきっかけ(理由)

否定感を持った14ケースの、その習い事を始めた理由を表12に示す。

多くの学生が「親など大人に勧められて」(50.0%)、「兄弟や友達が通っていたから」(42.9%)をあげており、「自分の意思で始めたいと思った

早期教育のあり方について考える

表 12 否定的なケースの学生が 習い事を始めたきっかけ (2013 年・複数回答)

	学生が否定的	保護者が否定的	学生・保護者とも否定的	計 (人数と割合)
自分の意思で始めたいと思ったから		1		1 (7.1%)
兄弟や友達が通っていたから	4	1	1	6 (42.9%)
新しい友達が欲しかったから		1		1 (7.1%)
親など大人に勧められて	3	3	1	7 (50.0%)
その他	1			1 (7.1%)

から」は7.1%のみであった。

1997年調査でも、表13のように、多くの学生が「親など大人に勧められて」(66.7%)、「兄弟や友

達が通っていたから」(50.0%)をあげているが、33.3%の学生は「自分の意思で始めたいと思ったから」もあげている。

表13 否定的なケースの学生が 習い事を始めたきっかけ (1997年・複数回答)

	学生が否定的	保護者が否定的	学生・保護者とも否定的	計 (人数と割合)
自分の意思で始めたいと思ったから	4			4 (33.3%)
兄弟や友達が通っていたから	2	3	1	6 (50.0%)
新しい友達が欲しかったから				0
親など大人に勧められて	5	2	1	8 (66.7%)
その他				

「自分の意思で始めたいと思ったから」と回答した学生が1997年調査では33.3%いるのに対して、2013年調査では7.1%のみであり、自分の意思で始めたという者の減少は特記すべき傾向であろう。

表現を変えれば、子どもの意思如何にかかわらず習い事を始めたということになるだろうが、この傾向は表14、15に示した保護者側のデータにもあらわれている。

表 14 否定的なケースの保護者が習い事を始めさせたきっかけ (2013 年・複数回答)

	学生が否定的	保護者が否定的	学生・保護者とも否定的	計 (人数と割合)
子どもが習いたいと言ったから	2			2 (14.3%)
兄弟や友達に通っていたから	1	1		2 (14.3%)
友達作りのため	1			1 (7.1%)
何かを身につけてほしいと思ったから	2	3	2	7 (50.0%)
将来活かしてほしいと思ったから	3	1		4 (28.6%)
その他	1	1		2 (14.3%)

表 15 否定的なケースの保護者が習い事を始めさせたきっかけ (1997 年・複数回答)

	学生が否定的	保護者が否定的	学生・保護者とも否定的	計 (人数と割合)
子どもが習いたいと言ったから	2	2	1	5 (41.7%)
兄弟や友達に通っていたから	3		1	4 (33.3%)
友達作りのため		1		1 (8.3%)
何かを身につけてほしいと思ったから	6	3	1	10 (88.3%)
将来活かしてほしいと思ったから		2		2 (16.7%)
その他				

表14の2013年調査において、「子どもが習いたいと言ったから」が14.3%のみであるのに対して、「何かを身につけてほしいと思ったから」(50.0%)「将来活かしてほしいと思ったから」(28.6%)の数値が高く、主に保護者の意向で始めたことがわかる。

1997年調査でも、「子どもが習いたいと言ったから」「兄弟が通っていたから」もそれぞれ41.7%、33.3%あがっているが、「何かを身につけてほしいと思ったから」が88.3%と高い割合になっており、やはり保護者の意向が大であったことは否めない。

2013年調査の14ケース中、学生が否定的な場合の理由として「遊びたかった」「縛られるのがいやだった」「強制的にやらされていたので楽しくなかった」「自分の意思で行っていないので身に付かなかった」等の記述からも、子どもの意思を尊重しないことが後々否定感につながることを示唆していると思われる。

③ 習い事をはじめたきっかけについての親子の一致の程度

上記②において、「強制的にやらされていたので楽しくなかった」と記述している学生の保護者が「活かしていることに本人が満足しているからよかった」と回答しているケース、「友達ができたし、普段できないことができた」と記述した学生の保護者が「意味なかった」と回答しているケースは、両者の気持ちのずれ違いが存在することを示している。

習い事をはじめたきっかけについての親子間の一致不一致に関しても表16の通り、調査全体の割合に比べて不一致の割合が多い。この傾向は1997年に比べて2013年調査でより顕著である。

以上②③を総じて、子どもの意思を尊重する程度が少ない場合に満足感が少ないといえるのではないだろうか。

表 16 きっかけについての親子の一致の程度

	2013年	1997年
	人数 (割合)	人数 (割合)
一致群	8 (57.1%)	8 (66.7%)
不一致群	6 (42.9%)	4 (33.3%)

IV 討論

以上、今回実施した習い事に関する調査結果は以下のとおりである。

- 平均2.67種類の習い事を経験していた。
 - 習い事の種類は多いものからピアノ、習字、水泳、英語、算盤、体操、バレエであった。
 - 水泳等、4歳3か月から始められたものもあるが、平均6歳3か月から11歳6か月まで習っていた。
 - 今現在も続けている学生はピアノで13.5%、習字で3.4%と非常に少ない。
 - 習い事をはじめたきっかけについては半数近くの学生が「自分の意思」(46.9%)と「親に勧められて」(46.2%)を挙げていた。
 - 保護者が習い事をはじめさせたきっかけは「子どもの意思」(37.1%)より「何かを身につけてほしい」(49.0%)の方が多かった。
 - 習い事をはじめたきっかけについて親子の気持ちが一貫していたかについては62.2%の親子で一致していた。
 - ほとんどの親子とも、振り返ってみて、やってよかったと思っていることがわかった。
 - 自分の意思ではなく、親に勧められて始め、しかも平均より若干早く始め、平均より若干長く続けた場合に、習い事をしたことに対して否定感情が生まれている。また、否定感を持っている場合、習い事をはじめた理由の親子の一致度は平均より低い。
- 以上の結果はおおむね1997年調査と共通のものであるが、いくつかの注目すべき点も浮かび上がった。即ち、
- 習い事の数は1997年で若干多い。
 - 1997年調査、2013年調査ともに一番多くあげられた習い事は、保育科らしくピアノであったが、1997年調査では、習字、算盤、水泳、エレクトーン英語、絵画が続いた。
 - 習っていた時期は1997年調査では6歳10か月から11歳8か月であり、2013年時点の方が若干早く始め、わずかではあるが早く止めている。
 - 短大入学後も続けている者は、1997年調査でピアノ41.5%との回答があり、エレクトーン、習字、英語でも11~12%あるが、2013年調査では短大入学時にも続けている学生はピアノ13.5%、

習字3.4%と非常に少ない。

- 習い事を始めたきっかけについては、学生的心思よりも保護者の意向で始めた割合が2013年で高くなっている。
- 習い事を始めたきっかけについての親子の一致度は1997年より低下している。
- 1997年、2013年ともに、ほとんどの学生、保護者が習い事をしてよかったと思っているが、学生では2013年度の方がより多くの者がよかったと思っている。
- 早期教育に賛成の学生は、1997年調査では1.7%のみであったが、2013年には22.3%へと大幅に増加している。

以上、1997年調査から16年を経た比較調査においていくつかの注目すべき傾向が示されていると思われるので、そのいくつかについて考察を加えることとする。

① 習い事の種類の減少と変化に関して

習い事の数が減ったことについては社会経済的環境の変化が影響しているのであろうか。

1997年調査の学生たちは1979年前後に生まれ、1985年から1990年頃、彼らが平均6歳10か月から11歳8か月頃に習い事をしてきた(表4、図2参照)ことになる。はじめに述べたようにバブルが崩壊し、日本の発展と成長の時代の終焉を迎えたのが1991年であり、彼らが習い事を始めた頃の保護者はまだそれまでの右肩上がりの経済意識の中にあり、子どもに種々の習い事をさせたのかもしれない。

2013年調査の学生たちは1995年前後に生まれ、2001年から2006年頃、彼らが平均6歳3か月から11歳6か月頃に習い事をしてきた(表3、図2参照)ことになる。リーマンショックが2008年であり、彼らが習い事をしてきた頃は経済の陰りがみられ始めた頃と考えられよう。保護者たちは、子どもの教育に対する経済的負担を感じながらも、我が子のことを思い、習い事をさせたのかもしれない。子育てをするに際して保護者が子どもに対して夢や期待を抱くのは当然のことであり、保護者が子どもに習い事をさせるのは、調査結果に示されているように、「何かを身につけてほしい」「将来活かしてほしい」からである。これらの背景が習い事の数 of 若干の減少に結びついているのかもしれない。

しれない。この我が子を思う気持ちの表れは、自由記述欄にほとんどと言ってよい位の保護者の記述があったことからうかがえるであろう。

そして保護者の気持ちは、子どもの環境が変化する時代の中であって、スポーツ系の習い事が増加したことに現れていると思われる。

文部科学省が2013年、20歳以上の3000人を対象に行った調査では、今の子どもの外遊び環境が、昔に比べて悪くなったと感じている大人が6割に上ることが報告されている⁽²⁾。自分の子どものころと比べ、今のスポーツや外遊びの環境をどう感じるかと尋ねたところ、「悪くなった」60.8%、「よくなった」27.3%、「変わらない」8.4%であった。理由は「子どもが自由に遊べる空き地や生活道路が少なくなった」「スポーツや外遊びができる時間が少なくなった」「スポーツや外遊びができる仲間が少なくなった」などであった。

これら外遊び環境の悪化は急に悪化したわけではなく、当然しばらく前からの傾向であり、世の中全体で環境の悪化をカバーするためのスポーツ系の習い事が徐々に盛んになり、筆者が今回調査した本学学生の保護者たちもスポーツ系の習い事をさせることになったのであろう。

② 早期教育について

以上のように、いつの時代も習い事にはその時代背景、保護者の意識が反映されると思われるが、次に早期教育そのものについて考えたい。

1997年の結果と比較して注目すべき点の1つに、今回の調査で早期教育について賛成する学生が増加していることをあげた。今日では早期教育はかなり常態化し、抵抗なく受け入れられるということであろうか。早期教育が常態化しつつあると思われる現代の保護者たちは純粋に我が子を思う気持ちから習い事をさせているのであろうか。

今日の母親たちは少子化が進む中で、少なくなった子どもに過大な関心を向け、肥大化した情報の前で、育児の目標を確固としたものとして持ちにくくなってしまっているのかもしれない。そのような母親たちにいわれる教育産業が巧みなことばで働きかけ、育児不安を引き起こし、その結果、子どもの意思に関係なく、親の意向で、親自身の自己実現や達成感の道具になってしまった早

期教育に子どもたちを追い込んでいるのではと危惧するのは筆者だけであろうか。

汐見⁽³⁾は、早期教育を「子どもの何かの力を伸ばそうとして、意図的に行う大人からの働きかけの中で、その社会の中での平均的な開始時期よりもかなり早くから開始されるもの」と漠然とではあるが定義し、0、1、2歳ぐらいから、文字だとか、数だとかの教育を始めるのを、超早期教育と言っている。そして早期教育熱が高まった理由として、①育児環境が少しずつ「放っておいても育つ」ものでなくなり、育児がひとえに生みの親の手にかかるようになってきたため、今日の親は育児の基本目標や方法でしっかりとした自己信頼を持ちきれずにいること、②親自身受験に追い立てられた世代で、子どもは自由に放っておいたほうがよく育つという感覚を持ってないでいること、③時代の変化が大きく、育児の目標を確固としたものとして持てず、自信喪失につながっていること、④企業も戦略の転換期にあり、周到的なマーケットリサーチのもと、うまく親に働きかけていることの4点をあげ、早期教育熱が高まったのは、現代の親が不安な子育てをしているからだとして述べている。

そして、早期教育の効果そのものについてはまだ未定ことが多いが、子どもの意思に関係なく教えた場合に比べて、子どもが興味を持った時に与えた方が後々「情緒性」「自発性」「運動性」「認知性」「言語性」「社会性」など、子どもの育ちに差が出ること⁽⁴⁾を引用し、早期教育が行われているときの親子の関係の変化や、親の我が子への期待の変化などがもたらす影響が、子どもの心身の発達にどのように影響するか懸念されると述べている。

本調査において早期教育に賛成する学生が増えたことについては、早い時期から様々なことを行うのが常態化している昨今を反映していると思われるが、特に乳児にいろいろのことを教えることの影響についてはまだまだわからないことが多いのである。

小児科医小西⁽⁵⁾は、「近年脳科学の進歩が目覚ましく、明らかになったことは多いが、乳幼児期のことに関してはまだ途に就いたばかりである。」と述べ、「赤ちゃんの優れた能力、“自ら育つチカ

ラ”が明らかになってきたが、負の部分もまた大きくなりつつある。本来の意味から離れてイメージだけが先行してしまっている『脳科学』という言葉が躍り、さらにもっともらしく『脳を育てる』『育脳』といった言葉が育児や保育の中にまで氾濫するようになり、早期教育や超早期教育が叫ばれ、あざとくさまざまな育脳グッズや『なんとか法』が宣伝されている。一方では、生活リズムや食事などの育児の基本は乱れていることが多く、睡眠障害や偏食の問題は無視できない状態になっている。乳児期は子どもが育つための基礎を整える大切な時期であり、生活リズムや食事のような日常のことほど、生きる力を鍛えるためには重要なことなのである。」と述べている。

早期教育そのものの定義や子どもの発達への影響については、筆者も拙稿⁽⁶⁾⁽⁷⁾で考察してきたが、時代的背景が変化し、保護者の意識も変化してきた今日、改めて考察する必要性を感じる。いずれ稿を改めて考察したいと思う。

V おわりに

本学学生とその保護者に対して習い事についてのアンケート調査を行い、1997年に行った同様の調査結果と比較検討した。

調査結果はIIの通りであり、注目すべきいくつかの傾向についてはIVで考察を加えたが、習い事を子どもの意思よりも親の意向で始めた割合が高くなっている点に関してさらに触れておきたい。

子どもの意思よりも親の意向で始めた割合が高くなったことに関しては、確かに習い事を始めるにあたって子どもの意思を確認することは難しいことであるかもしれない。しかし、すべてを親の意向で決めてしまうことを繰り返すことは、子どもの自主性が育つ芽を摘み取ってしまうことにならないだろうか。たとえ幼い子どもであっても、未熟ながら自分で決めるといふ子どもの権利を奪うことになってしまう危険性があるのではないだろうか。「強制的にやらされていたので楽しくなかった」「自分の意思で行っていないので身に付かなかつた」など、習い事をしたことに対して否定的な学生の回答に耳を傾けるべきである。

保護者向けアンケートの最後に「現代社会にお

ける幼児教育や早期教育についてお感じになることがありましたらお書きください」と自由記述欄を設けておいたが、それに対して「幼児期の習い事は始める時は親の意思、続ける・続けないは子ども本人の意思で決め、決して無理強いすることはよくないと感じる。」「始めるきっかけをつくるのは大人が多いと思う。ストレスになっていないかなど気をつけて様子を見てあげることが大切と思う。」「子どもの意思ではなく親の見栄などで習い事をさせるとその後の子どもの性格、親子関係などに影響してくると思うので、まず子どもの意見を聞いてあげるのが一番だと思う。」などの記述があった。このような姿勢で子どもに向き合ってほしいものである。

また、「早期のマニュアル化したもので教育のスタートをするのは考えものかを感じる。」「子どもの意見を聞いてあげるのが一番だと思う。ただ子どもの才能を見抜いて伸ばしてあげるのは良いことだと思う。」「どれだけ子どもと関わりをもつかは、時間ではなく内容の濃さだと思う。」「現代の子どもは習い事ばかりで普通に外で友達と遊ぶことがあまりなくなっている。そのためかコミュニケーション能力があまりなくなっているように思う。昔の子どもがしていた遊びや経験の中にこそ大切なことがあったように思う。」などの記述もみられた。これらは我が子の幼少期・学童期を過ぎてからの記述であり、当時の反省も込めての文言かもしれないが、このような考えを持って子どもの成長を着実にサポートしてほしいものと思う。

筆者は、どのような時代であっても、心身ともに目覚ましい成長・発達を遂げる乳幼児期にまわりの大人から愛され、子ども時代を存分に過ごすことの大切さは不変であると考えているが、このように考えることのできる保育者、保護者が増えてほしいものと思う。そして、子どもの成長にかかわるすべての大人には今後、先の小西氏の言葉に再度耳を傾け、子どもの真の成長にとって何が大切であるのかを考え、子どもの内面に気を配る

ことのできる姿勢がますます重要な役割として求められるものと考えてる。

さらに、生命科学研究者中村が近著⁽⁸⁾において、コンピュータを用いての実験や観察を進めた霊長類研究所の研究にふれて「チンパンジーは自ら進んで学ぼうとします。アイやアユムの実験室での様子を見てみるとそれがよくわかります。これは、知識欲そのものは、生きものが持つ能力として、私たちの中にも本来備わっているはずだということを示しています。そうすると、教育という特有のシステムを作りあげた人間はむしろ、子どもたちの自発的な知識欲、自ら学ぶ喜びを奪っているのかもしれない。考えなければならぬことです。」と述べているように、教育そのものについても再考する必要があると考える。

【註】

- (1) 拙稿 1997 早期教育と子どもの発達について考える——本学学生とその母親への習い事についての回想調査に基づいて—— 名古屋柳城短期大学研究紀要 第19号 pp35-52
- (2) 文部科学省 2013 体力・スポーツに関する世論調査
- (3) 汐見俊幸 1998 中央教育審議会 幼児期からの心の教育に関する小委員会議事録
- (4) 中野由美子 1993 乳幼児期の早期教育——早期の識字教育と子どもの発達—— 家庭教育研究所紀要 No.15 pp86-96
- (5) 小西行郎 2013 赤ちゃんから学ぶ、育つチカラ～発達とその障害を理解する～ 2013年度名古屋芸術大学人間発達学部特別公開講座
- (6) 拙稿 1993 子どもの発達と早期教育 高田短期大学紀要 第11号 pp131-144
- (7) 拙稿 1995 早期教育と子どもの発達——ベビースイミングスクール生および修了生へのアンケートから—— 高田短期大学紀要 第13号 pp1-13
- (8) 中村桂子 2013 科学者が人間であること 岩波書店

資料 I

問 1 子どもの頃、何か習い事をしていましたか。 はい・いいえ

☆ 問 1 で「はい」と答えた人に

問 2 - 1 何を習っていましたか。その期間も答えてください。

例： ピアノ 4歳～現在も習っている

問 2 - 2 習い事を始めたきっかけ（もしくは目的）は何ですか。

- a 自分の意思で始めたいと思ったから
- b 兄弟や友達が通っていたから
- c 新しい友達が欲しかったから
- d 親など大人に勧められて
- e その他 ()

問 2 - 3 習い事をしてよかったと思いますか。 はい・いいえ

その理由 { }

問 2 - 4 子どもの頃始めた習い事が今の自分にプラスになっていると思いますか。 はい・いいえ

その理由 { }

問 3 問 1 で「いいえ」と答えた人になぜ習い事をしなかったのですか。

- a 習いたかったが親に反対されたため
- b 習い事をしたいと思わなかったため
- c その他 ()

問 4 振り返ってみて、子どもの頃に始めておけばよかったと思う習い事がありますか。あれば、その習い事と理由を書いてください。

問 5 早期教育熱の高まりから、現在では、胎児の頃から教育を始める風潮もありますが、このことについてどう思いますか。 賛成・反対・どちらとも言えない

その理由 { }

ご苦労様でした。
() 組 () 番

早期教育のあり方について考える

資料Ⅱ

問1 お子様が子どもの頃、何か習い事をさせられましたか。 はい・いいえ

☆ 問1で「はい」と答えた方にお聞きします。

問2-1 お子様で習い事を始めさせようと思われたきっかけ（もしくは目的）は何ですか。

- a 子どもが習いたいと言ったから
- b 友達作りのため
- c 兄弟や友達が通っていたから
- d 何かを身につけてほしいと思ったから
- e 将来に活かしてほしいと思ったから
- f その他 ()

問2-2 お子様で習い事をさせてよかったと思えますか。 はい・いいえ

その理由 ()

問2-3 その習い事は、現在のお子様プラスになっていると思えますか はい・いいえ

その理由 ()

問3 問1で「いいえ」と答えた方にお聞きします。習い事をさせなかった理由をお聞かせください。

()

問4 お子様で子どもの頃に始めさせておけばよかったと思われる習い事はありますか。ありましたら、その習い事と理由をお書きください。

問5 早期教育熱の高まりから、現在では、胎児から教育を始めることもあるようですが、この現象についてどう思われますか。

その理由 ()

問6 現代社会における幼児教育や早期教育についてお感じになることがありましたらお書きください。

◇お忙しいところ大変ありがとうございました。

() 組 () 番

Early Education and Child Development

— Based on Questionnaires to the Parents and Students of the Department of Early Childhood Care and Education —

Narita, Tomoko*

今日では幼児期の比較的早い時期から様々な習い事をする風潮にあるが、それら早期の経験が子どもの発達に寄与するものであるためには、どのような経験であっても、後から振り返ってやってよかったと思える経験であることが必要であると考えられる。本学学生とその保護者に対して習い事についてのアンケート調査を行い、1997年に行った調査結果と比較検討した。学生たちはピアノ、習字、水泳等2.67種類の習い事を、自分の意思で、あるいは親に勧められて6歳3か月から11歳6か月頃まで行っていた。これらは概ね1997年と同様の結果であったが、1997年に比べて習い事を始めるに際して親の意向がより強い傾向がみられた。そして、平均より早くから親の意向で始めた場合に、その習い事をしたことに対する否定感情が生まれる危険性が示され、子どもの気持ちを尊重することの大切さが示唆された。早期教育という用語について、また早期教育熱が高まった要因についても考察し、乳幼児期は子どもが育つための基礎を整えるという意味において大切な時期であることを確認した。

キーワード：習い事, やってよかった経験, 子どもの意思, 早期教育, 乳幼児期の意義